別府大学通信 No.107

BeNews

2013.Autumn

［特集］

別府大学･別府大学短期大学部の国際理解教育(2)…1-2

contents

●教育CloseUp
発酵食品学科のバイオテクノロジー教育と研究
― 8年間を振り返って……3
別府大学短期大学部地域総合科学科における
国際交流の歩み……4
●研究者インタビュー
高木　伸幸（国際言語・文化学科 准教授）……5
古木　美香（食物栄養科　講師）……6
●国際交流･がんばってます留学生……7
●いきいき別大生……8
●新任教職員紹介……9
●学園News……10-13
●平成24年度学校法人別府大学の事業報告(抄)…14-17
●学園関係の新聞掲載記事……18

佐藤 麻里子「橙」S100 キャンバス・油彩

特集　別府大学・別府大学短期大学部の国際理解教育（2）

別府大学・別府大学短期大学部における留学生の受け入れ

別府大学と別府大学短期大学部（以下、本学と総称する。）は長年国際理解教育を教育の柱の一つとして掲げてきました。前号（NO106号）では、国際理解教育の前提となる本学の国際交流の取組みについて紹介しました。

今号では、そのような交流を基礎に進めてきた外国人留学生（以下、留学生という。）の受け入れについて紹介します。

1. 留学生受け入れの歴史

本学園創始者の佐藤義詮先生が西洋哲学の研究者であり、本学の建学の精神にラテン語の「VERITAS LIBERAT（真理は我らを自由にする）」を掲げたことに象徴されるように、本学は建学当初から国際理解教育に取り組んできました。佐藤先生の遺志を受け継いだ前理事長西村駿一先生は、今世紀における国際化の流れをいち早く見通して、国際交流を積極的に推進し、多くの海外の教育機関と交流協定を結びました。このような海外教育機関との協定を通じ、本学はこれまで多くの留学生を受け入れてきました。

本学が留学生を受け入れ始めたのは1975年からです。当初は一桁乃至二桁の受け入れ人数でしたが、1993年に100名を超し、その後徐々に増加して、1999年以降は毎年200名程度が入学するようになりました。この受け入れ数の漸増は、政府の「留学生受け入れ10万人計画」に基づき、本学が積極的に留学生の受け入れ体制を整備していったことを背景としています。そのような受け入れ体制の整備の状況を年表形式で整理すると、次の通りです。

下の表1は2000年以降現在に至るまでの留学生の受け入れ人数です。

1986年　学校法人佐藤学園別府大学海外交流規程※を策定
（留学生の受け入れを明記）
1989年　別科日本語課程を開設
（大学進学を目的とした日本語教育機関）
1995年　短期留学制度を開始　（半年乃至1年間の留学制度）
1997年　別府大学・別府大学短期大学部国際交流委員会が発足
1998年　別府大学大学院日本語・日本文学専攻を開設
（大学院への留学生受け入れ）
1999年　文学部国文学科の定員に外国人枠を開設
（国文学科における留学生の受け入れ促進）
2000年　日本語・日本文学教育研究センターを開設
（現日本語教育研究センターの前身）
国文学科に日本語課程及び日本語教員養成課程を開設
（日本人・外国人学生に日本語教師の道を開く）
2001年　短大英語コミュニケーション科日中・日韓通訳コースを開設
（短大における留学生の受け入れ）
2002年　留学生委員会、留学生課（旧国際交流課）が発足
（留学生に特化した教員と職員の組織）

※現在は学校法人別府大学海外交流規程

2. 受け入れ対象国

本学は韓国・台湾・中国・アメリカ・フランス・イギリス・ニュージーランドの教育機関と交流協定を結んでおり、これらの国を中心に現在８ヶ国から留学生を受け入れています。

下の表2は2000年以降の主要な受け入れ対象国（中国・韓国・台湾）の在籍留学生数です。

3. 留学生の修学支援・指導

留学生は日本人学生と同様に教養と専門の教育課程を修めて卒業しますが、本学の留学生教育の特色は、そのような教育課程に入る前に、日本語能力を徹底して鍛錬するところにあります。

表１　留学生受け入れ数（前・後期入学者数）

学校／年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
大学院	13	5	16	7	11	14	8	8	7	6	2	5	5	2
大学	82	106	137	111	90	84	104	87	81	78	107	119	111	70
短大	17	80	65	87	74	55	110	102	109	61	44	39	51	10
別科	94	76	50	35	50	36	66	63	57	71	39	45	33	34
合計	206	267	268	240	225	189	288	260	254	216	192	208	200	116

※3年次編入を含む。短期留学・研究生・科目等履修生は除く。

表２　国ごとの在籍留学生数（各年度５月１日現在数）

国／年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013
韓国	57	124	175	177	157	123	88	90	80	69	48	36	34	38
中国	31	58	180	231	285	300	327	335	382	358	330	353	381	336
台湾	27	51	58	48	36	27	33	32	21	17	12	8	6	5
その他	0	0	0	0	8	8	15	23	18	15	8	5	9	9
合計	115	233	413	456	486	458	463	480	501	459	398	402	430	388

※短期留学・研究生・科目等履修生、別科は除く。

(1) 日本語教育

現在、本学の日本語教育の中核は、別科日本語課程と日本語教育研究センターで、両機関を併せて留学生教育機構と称しています。

別科日本語課程は上述の通り、大学進学を目指す留学生の日本語教育の機関として1989年に開設されました。当初、30名の定員で出発しましたが、現在は80名の定員を擁しており、毎年多くの学生が本学本科を始め、高等教育機関に進学しています。

別科の授業風景

日本語教育研究センターは2009年に開設され、大学･短大に進学してきた留学生の日本語教育を担当しています。ほとんどの留学生（日本語能力試験N1合格者は除く）は入学後半年間、当センターでみっちり日本語を学び、各学科の専門課程に進みます。留学生は習熟度別にクラス編成され、１日３コマの日本語授業を履修し、専門課程での学習に備えます。当センターはまた、短期留学生（半年乃至１年間修学）の大学生活のサポートも行っています。 表3 はセンターの日本語学習プログラムのモデル時間割です。

表３

※1コマ各90分授業

	月	火	水	木	金
1	上級日本語聴解１	アカデミック・リーディング１	上級日本語聴解１	上級日本語読解１	アカデミック・プレゼンテーション１
2	上級日本語文法１	アカデミック・リーディング１	アカデミックプレゼンテーション１	上級日本語読解１	アカデミック・ライティング３
3	上級日本語文学・語彙１	アカデミック・リーディング１	上級日本語文学・語彙１	アカデミック・ライティング１	アカデミック・スキル１

読む技能：上級日本語読解１〔2〕／アカデミックリーディング１〔2〕
聴く技能：上級日本語聴解１〔2〕
書く技能：アカデミックライティング１〔2〕／アカデミックライティング３〔1〕
話す技能：アカデミックプレゼンテーション１〔2〕／アカデミックスキル１〔1〕
言語構造に係る能力：上級日本語文学・語彙１〔2〕／上級日本語文法１〔1〕

(2) 学科教育

当初、留学生は文学部の国文学科や芸術文化学科（両学科は2009年に国際言語・文化学科に再編）、短期大学部の英語コミュニケーション科に多く籍を置いていましたが、社会情勢の変化に伴い、現在では国際経営学科（2009年開設）や国際言語・文化学科（同前）のマンガ・アニメーションコース、短大の地域総合科学科に多く進学するようになりました。各学科では日本人学生と同様に学科の専門教育が施されており、日本あるいは母国において専門を生かした職業に従事する者も少なくありません。

(3) 留学生委員会と留学生課

留学生の修学支援・指導は基本的には各所属学科が行いますが、全学的な観点からその衝に当たる組織として、留学生委員会及び事務部留学生課を設けています。

留学生委員会は大学院以下の留学生が所属する各専攻・学科の教員（留学生委員）と関係事務職員で構成する組織で、主として留学生の修学・在籍管理・福利厚生等に係る事項について協議・執行します。留学生課は当該委員会の事務的支援と留学生に関する事務処理に当たります。このほか留学生のさまざまな相談に応じるため、各国のネイティブ教員を担当者とする相談室を設けています。

4. 留学生の福利厚生

(1) 授業料の減免と各種奨学金及び留学生寮

本学では、経済的理由で修学困難な留学生については、授業料の40%を減免しています。また、２年生以上の学業が優秀な学生、および１年生で入学前に日本語能力試験N１に合格した学生に対し、授業料の10%を奨学金として支給しています。このほか留学生については、国の学習奨励費や大分県･別府市あるいは民間の各種奨学金制度があり、大学を通じて運用されています。

留学生の宿舎については、キャンパス内外に複数の学生寮等を設けており、快適な寮生活が送れるように配慮されています。

(2) 留学生の生活支援

留学生は国際的な通貨変動により、時として留学生活に困窮を来すことがあります。そのような事態に対処するため、本学は2002年に学生生徒緊急生活支援対策資金制度を立ち上げ、また2009年には教職員による留学生後援会を組織するとともに、留学生を経済的に支援する基金を設立しました。この間の長い円高の時期においても、これらの支援制度が機能し、留学生の生活が深刻な事態に至ることはありませんでした。

5. おわりに

現在、領土問題が原因で、日本と中国・韓国との関係が悪化しています。大変残念なことであり、今後の成り行きが憂慮されます。このような時こそ民間の国際交流を通して、両国国民が相互に相手国を理解し、現状を克服する努力を払うべきでしょう。その点で、今後、留学生の果たす役割は大きいものがあると思います。本学は今後とも国際交流を推進するとともに、留学生を受け入れ、国際理解教育に努めていきたいと思います。

発酵食品学科のバイオテクノロジー教育と研究−8年間を振り返って

発酵食品学科は、2006年に食物バイオ学科の名称で別府大学食物栄養科学部に開設されました。10年目が近づこうとしている今、発酵食品学科におけるバイオテクノロジー教育と研究の８年間を本コーナーで振り返ってみたいと思います。

県内各高校のバイオテクノロジー教育支援活動

ニュー・バイオのバイオテクノロジーはオールド・バイオの醸造発酵技術と並んで、発酵食品学科における教育の中核を担っています。大分県唯一のバイオ系学科としての立場を生かして、これまで発酵食品学科は県内の高校を中心としたバイオテクノロジー教育の普及活動を行ってきました。これは別府大学の食物栄養科学部発酵食品学科設立時に設置された最先端のバイオの設備と、それを最大限に活用して教育・研究活動を推進する教員の熱意によるものです。

特に、県内各高校が進めるスーパー・サイエンス・ハイスクール（SSH）活動への協力と、出前授業や高校の生徒や理科教員を対象とした大学訪問によるバイオテクノロジー実験講習会の実施により、県内の高校におけるバイオテクノロジー教育の普及に発酵食品学科は大きな貢献を果たしています。

さらに、本年度より発酵食品学科の林毅准教授が中心となって、県下各高校での遺伝子組換えの出前実験の実施がスタートしました。一年間で1000名の県下高校の生徒に対して遺伝子組換え実験を行います。この計画は、今年から高校の理科教育において遺伝子組換え実験の実施が強く求められるようになり、現場の理科教員の強い要望により始まりました。発酵食品学科の教員単独では不可能であるので、発酵食品学科の学生に呼びかけてこの活動への参加を募りました。発酵食品学科の学生が高校生に遺伝子組換え実験を指導することにより、バイオテクノロジーへの一層の理解を深めることができるという相乗効果を予想しており、高校生と発酵食品学科の学生の両方にとって有意義な経験になることを期待しています。

バイオテクノロジー実験講習会の様子

バイオテクノロジーの光と陰

遺伝子組換え大豆などの遺伝子組換え作物（GM作物）について、日本ではネガティブなイメージが強いのではないでしょうか。GM作物の開発と利用に関しては現在も賛否両論があり、論争に決着がついていません。また、国々によって考えが異なり、GM作物を最初に開発し、普及に熱心なアメリカに比べ、日本やヨーロッパの国々は普及には消極的です。しかし現在全世界の大豆の作付けのうち約80%がGM大豆といわれており、そうした現実をふまえてGM作物問題を考えていかなければなりません。GM作物は害虫に強く農薬の使用量が減らせるため、収穫量が増大しコストを低く抑えることができる大きなメリットがあるのです。GM大豆には、天然の大豆にはない人為的な組換え遺伝子と、それが作り出す外来の蛋白質が含まれていることを除けば、天然の大豆と違いはありません。GM作物否定派の人たちは、GM作物に含まれる天然のものにはない“異物”による危険性を危惧しています。しかし我々の研究からも、GM大豆を原料とした発酵食品の醤油や味噌において、熟成の過程で組換え遺伝子とそれが作り出す蛋白質が完全に分解されて、成分は天然のものと全く変わらないことが分かっています。つまり微生物による発酵によってGM作物は天然のものと同じものになる場合があるということです。一方で、欧米において米に代わる主食といえる小麦については、GM作物を推進するアメリカでさえ普及に関して消極的です。最近アメリカの農場で、野外には存在しないはずの遺伝子組換え小麦が見つかり大騒ぎになりました。GM作物の問題ひとつとっても各国の事情があり、遺伝子操作には複雑な問題が付随しています。発酵食品学科では、発酵食品の原料となるGM作物の問題などを授業でとりあげて学生主体で議論することにより、広い視野を持った学生が育つように努めています。

まだ記憶に新しい山中伸弥教授のiPS細胞研究でのノーベル賞受賞も、遺伝子操作の技術なくして実現しなかったように、遺伝子操作を含めたバイオテクノロジーは人類の幸福な未来にとって無限の可能性を秘めています。ただし、使い方を誤ることが不幸を招くことは他の科学の分野の歴史が物語っています。こうした観点から発酵食品学科では、生命科学の倫理的な面についても重視した教育を進めていきたいと考えています。

発酵食品学科でのバイオテクノロジー研究

今年８年目を迎えた発酵食品学科では、現在様々な研究が進行中です。発酵食品学科は地域社会への貢献を当初から掲げており、大分の地場（醸造発酵）産業との関わりを重視してきました。古川謙介教授（現客員教授）が中心となってスタートした三和酒類との共同研究はその中でも代表的なものです。バイオテクノロジーの技術を駆使して、新たなアルコール発酵微生物の開発や、焼酎の製造に欠かせない大分酵母のスクリーニング法の開発などの成果をこれまで挙げてきました。それ以外にも、別府温泉の好熱菌の研究や、PCBやダイオキシンなどの環境汚染物質や日田杉に由来する難分解性物質の分解菌の研究など、微生物を題材としてバイオテクノロジーの技術を適用することにより、地域社会への貢献を目指して学生と一緒に研究を進めています。

食品と健康面においても、最近問題となっている食物アレルギーに関して発酵食品学科では研究を推進しており、その原因物質の同定にバイオテクノロジーの技術は欠かせませんでした。高齢化社会において問題となっているガンの新しい治療法の開発や、幹細胞の再生医療への応用をめざした基礎研究などが、現在発酵食品学科で進行中です。いずれの研究においてもバイオテクノロジーの技術と知識は研究の進展になくてはならない中枢の技術といえます。

今後も地域貢献を掲げて、発酵食品学科10年目に向けて、バイオテクノロジー教育と研究を推進していきたいと考えています。

発酵食品学科の実験風景

別府大学短期大学部地域総合科学科における国際交流の歩み

地域総合科学科と学外活動

別府大学短期大学部地域総合科学科は、大分におけるビジネス実践教育の担い手として長年にわたって地域に貢献してきました。このコーナーでは、そのような学科の歴史を国際交流の面から振り返ってみたいと思います。

地域総合科学科は、商経科・生活文化科・英語コミュニケーション科を母体として、途中改組をはさみながら2004年に生まれました。その教育の目標は、地域社会を支えるビジネス・観光・福祉の３分野を横断的に学んで地域社会の発展に自覚的に参加するジェネラリストを養成することでした。

教育の特徴として、地域への視座を学生に持ってもらうために、学外活動を重視しました。学科必須の地域ボランティアやインターンシップと並び、国際交流に関わる諸活動も数多く行われました。

学科成立当時の国際交流活動

学科成立時からの国際交流活動としては、「車いすマラソン」のサポートと、海外研修旅行を核とする交流活動などがありました。

いずれも、単なる一過性のイベントではなく、半年以上の時間をかけた総合的な国際交流プログラムでした。特に、韓国の姉妹校との交流は、事前に電子メールやテレビ会議などインターネット環境を活用する先進的なプログラムでした。

韓国研修旅行での姉妹校交流

韓国との交流以外にも、現地での語学研修プログラムを核とするハワイの姉妹校訪問や、旅行社とタイアップした観光企画研修としてのヨーロッパツアーなど、多様な長期海外研修が学生たちに開かれていました。

このころの海外交流プログラムは、語学力をはじめとする国際交流に必要となるスキルを学生が身に付けることで、職場・地域の中で、学生たちが有利なポジションを獲得できるようにすることを目指すものであったといえます。

地域交流を支える外国人留学生

歴史的に、別府大学は一貫して海外留学生の受け入れについて積極的でしたが、学科成立期にはこうした流れが加速し、多くの留学生を擁するようになりました。

その結果、従来の地域交流プログラムはそのまま国際交流の場となりました。たとえば、地域総合科学科は長年にわたって由布市挾間町の「きちょくれ祭り」を支援してきましたが、留学生の参加により、準備段階での学生間の交流だけでなく、祭り当日の企画ステージへの出演など、地域住民と日本人学生・留学生の密接な協力のもとで行われるようになりました。「きちょくれ祭り」以外にも、別府キャンパス地区での「鬼の岩屋祭り」、竹田市の「小松明祭り」など、別府大学が交流協定を結んでいる様々な地域での行事では、留学生抜きには考えられないほど、親密な交流が行われるようになりました。

きちょくれ祭りで母国のダンスを披露する留学生

外国人留学生を生かした交流企画

留学生が増加するにつれ、従来の地域交流企画へ参加するだけでなく、留学生ならではの地域交流企画も生まれました。別府市では一昨年（2011年）より中国からの大型豪華客船を受け入れるようになりましたが、この企画は歓迎セレモニーから観光案内に至るまで、地域総合科学科の留学生を含む別府大学の留学生の全面的な協力よって実現しました。特に地域総合科学科では、この企画との連携を前提とした授業プログラムを準備しましたが、この他にも、ITを使った別府観光案内ガイドへの協力、旅行社や地方自治体と協力して取り組んだ、外国人目線での新企画開発など、留学生の存在を前提とした様々な地域連携・交流の試みが行われるようになったのです。

海外航路の客船の歓迎

今後に向けて

地域総合科学科の国際交流教育は、地域の発展に結びつく国際マインドの醸成をめざした学科成立当時のプログラムに始まり、そうしたプログラムへの留学生の参加を通じて、外国人留学生の存在を生かした新しい地域理解教育の開発にまで深化していきました。

そうして、最近の学科が重要な課題としていたのが、学科教育の体系そのものを外国人留学生の存在を生かしたものへと再構築すること、そのような仕組みを模索することです。バイタリティあふれる留学生の活力を日本人学生教育に活かすこの様な地域総合科学科の長年にわたる経験は、必ずや別府大学全体の資産として役立つものと信じています。

vol.15 高木（たかぎ） 伸幸（のぶゆき）

別府大学文学部国際言語・文化学科　准教授

本学伝統の文学研究を担う高木先生。理系に進学していたことや、北アルプスを縦走するアウトドア派であることなど、意外な一面に驚かされました。人間の心を静かに見つめる、奥の深い先生です。

弱さを抱えつつ、堕落しそうな自分を克己心で抑える井上靖作品の主人公に惹かれます。

ー先生のご専門は

日本の近現代文学です。作家では井上靖や梅崎春生などが主な研究対象です。

ーどうして文学研究に進まれたのですか

子どもの頃から本が大好きで、文学に関わる仕事がしたいと思っていました。実は作家になりたいという気持ちもあり、小説を書いていた時期もあります。でも、小説を書くより、論ずる方が自分に向いていたこともあって、研究する側になったというわけです。

ー子どもの頃から本好きだった

ええ。小学校５年生のときに佐藤さとるの『コロボックル物語』にはまり、小学校６年では新美南吉、中学１年では宮澤賢治の世界に魅了されました。当時、彼らのほぼ全作品を読んだと思います。好きな作家を集中して読むというスタイルは子どもの頃から今も変わりません。

ーその中で特に好きな作品は

新美南吉なら『鳥山鳥右ヱ門』、宮澤賢治なら『ペンネンネンネン・ネネムの伝記』ですね。

ー高校時代も本に夢中だった

いえ。高校時代は理系志望だったので、文学から少し距離を置いていました。その頃は文学を仕事にできるとは想像もできませんでした。その代り、高校では登山の世界にのめり込んでいました。生まれが埼玉県なので、甲信越の山々を中心に、上越国境の谷川岳にも登りました。

ーへえ。そう見えませんね（笑）

山や植物が好きだったので、大学は当初、千葉大学の造園学科（現・緑地環境学科）に入りました。自然保護の教育研究で知られた学科で、その方面に進むつもりでした。大学でもワンダーフォーゲル部に入り、道のない山野に入って、地図を頼りに跋渉する「藪こぎ」をよくやっていました。夏、40キロのザックを担いで北アルプスを２週間縦走したこともあります。

ー文学の世界に戻ったのは

千葉大学の通学に往復３時間かかったので、電車の中で文学作品に読みふけりました。そのうちに、どうせなら一番好きな文学に関わる仕事がしたいという思いが強くなり、千葉大を辞め、熊本大学に入り直しました。

ー卒論は井上靖。井上作品のどこに惹かれますか

ストイックなところですね。井上作品では、堕落しそうな自分を克己心で抑える主人公がよく描かれます。井上は旧制高校で柔道に没頭します。常識家でありながら、どこか孤独で厭世的なところがある。それが山に没頭した自分と重なって見えるところもありました。

ーその後梅崎春生を研究対象とされた

梅崎はとぼけた味わいの作品を書いていますが、よく読むと、その問いは深く、重い。直木賞を受けるなど、表面的には大衆小説の趣もありますが、本質は鋭い風刺性を持った戦後を代表する重要な作家です。今後は太宰治にも取り組む予定です。

高木 伸幸 先生　プロフィール

- 別府大学文学部国際言語・文化学科准教授
- 専門は日本近現代文学、国語科教育。著書に『井上靖研究序説－材料の意匠化の方法－』（武蔵野書房）
- 熊本大学教育学部国語専攻卒。広島大学大学院文学研究科博士課程後期国語学国文学専攻修了。博士（文学）。
- ラ・サール中学校・高等学校教諭を経て、本学に着任。
- 趣味は登山。ラ・サール時代は山岳部顧問として屋久島の宮之浦岳に10回近く登頂。インターハイ登山部門の鹿児島代表監督も務めた。現在は子どもと鶴見岳や高崎山に登る程度。今後は久住や由布岳にも足を延ばしたい。

ーいま、大学で文学を学ぶ意味とは何でしょう。

専門の知識や技能は、或る特定の世界では必要とされますが、それ以外では必ずしも通用しない。一方、文学を深く学ぶことによって得られる力は、非常に汎用性があり、普段の生活に生きてくる。例えば文章力や言語能力、会話力が鍛えられ、相手の心情を深く理解する態度が育まれる。これらはどの職業でも不可欠な力です。これが備わっている人は、どんな世界にでも対応できると思います。

ーアメリカのリベラルアーツ大学の発想ですね

文学作品や古典を基に、自分で考え、人と対話し、自立した個人として成長する。佐藤義詮先生が建学の精神「真理はわれらを自由にする」に求めたのもリベラルアーツの精神であり、本学の教育の特長として大切にすべきだと思います。

ー講義で心がけていることは

国語教員志望の学生が多いので、中学・高校でよく読まれる漱石、芥川、太宰らを教材に多く取り上げるようにしています。主要作品の重要な場面は必ず読み、作家の個性や文章の特徴を実感させるようにしています。先日も漱石の『明暗』を取り上げましたが、別大生は文学を深く読み込む学生が多く、すぐれた潜在能力を持っています。彼らの力を伸ばしてあげたいと思います。

ー学生へのメッセージがあればお願いします。

学生時代はあまり意識されないことですが、卒業後の人生で最も多くの時間を使うのは仕事です。将来どんな仕事をしたいのか、学生時代によく考えてください。興味ある仕事を持てれば、人生は充実し、楽しくなります。多くの本を読み、いろいろな経験をして、自分に向いた職業を真剣に探してください。

vol.16 古木（ふるき） 美香（みか）

別府大学短期大学部食物栄養科　講師

いつも笑顔で明るい表情の古木先生。柔らかく温かな雰囲気で周りを包み込みます。インタビューからは、献身的で素直な人柄、学生への深い愛が伝わってきました。

人を支えるのが栄養士の仕事。愛情に満ちた、信頼される栄養士を育てたい。

ー管理栄養士になられたきっかけは

高校生のとき、祖父が大腸の病気で入院し、食事療法で苦労しているのを目にしました。その経験から、病気で苦しんでいる人を支える仕事がしたいと考えるようになり、医療系の職に進もうと考えました。最初は看護師も視野に入れていましたが、最終的には一生の食事に関わることのできる管理栄養士を選択しました。

ー大学はどちらに

病院の栄養士を目指していたので、附属病院がある管理栄養士養成施設がよいと思い、岡山県にある川崎医療福祉大学に進みました。岡山の大学に兄がいたので、両親も安心するだろうと思いました。

ー大学ではどのような勉強を

大学時代にしかできない勉強をと思い、４年生のときに臨床栄養学のゼミに入りました。そこで、大腸を手術した後の栄養管理について生理学的に調べる研究に携わりました。モデルラットを用いた動物実験が主体で、貴重な経験をさせていただいたと思います。

ー卒業後は大学院に進学された

両親には地元に帰って就職する約束をしていたのですが、もう少し研究を続けたいと思い大学院に進みました。大学院生になると学部のゼミ生の指導を受け持つのですが、その経験を通して学生指導に対する喜びや充実感を感じることができ、教員として大学に残ることを考えるようになりました。

ー教育には昔から関心があったのですか

はい。小学校６年生のとき、隣の席の子にいろいろ教えてあげていると、それを見た担任の先生が「この子は教職に向いている」と母親にアドバイスしてくれたのです。その言葉は強く私の中に響き、栄養士を志す前は教師になりたいと考えていました。

ーとても素直な子どもだった

ええ（笑）。そういえば、６年生の時に「クラスで褒められた人ナンバーワン」に選ばれたことがあります（笑）。冗談はさておき、両親の影響もあって、子どものころから他人を助けたいという気持ちが強かったようです。小学生の頃は、習字や美術教室に通ったりして、どちらかと言えば家遊びを好むタイプの子どもだったですね。

ー普段の授業で心がけていることは

コミュニケーション力を伸ばすことです。「栄養教育論」を担当していますが、栄養士には、栄養学の知識だけではなく、それを分かりやすく興味がもてるように伝える能力が求められます。そのために他者と積極的に関わることができる人、信頼関係が築ける人を育てたいと思っています。

ーそのための具体的な工夫は

例えば、授業を進めるに当たって、教員からの一方通行で終わらせるのではなく、学生と対話しつつ、会話のキャッチボールを織り込むようにしています。その方が学生の理解度が分かりますし、授業も楽しいものになります。また、学生には、授業で分からない人がいたら、積極的に声をかけ、教えてあげるように指導しています。そのために、グループ学習を多く取り入れています。

ー学生同士の学びあいですね

短大は２年間という短い期間で一人前の栄養士を育てなければなりません。実務者として必要な知識・技術を身につけることはもちろんですが、仲間同士助け合って、人間的に成長できる環境を作り上げていくのも教員の役割だと考えています。

ー教材作りにも熱心に取り組まれていますね

子どものころから図画工作が好きだったので、自主研究会の学生と栄養教育のための絵本やクイズを製作したり、また高齢者のためのおやつなど新しい料理を考案してレシピ集を作成したりしています。週末は地域貢献のためのイベントにも積極的に参加させています。学生同士のコミュニケーションも図れますし、知識を分かりやすく伝える訓練にもなると期待しています。

ー食物栄養科の良さはどんなところですか

学生50名を２クラスに分けているため、学生と先生の距離が近く、とてもアットホームです。日常の触れ合いを通して学生をきめ細かく指導することができます。就職した学生を訪ねて仕事ぶりを確認したり、管理栄養士を目指す卒業生の勉強会（９月以降は毎週水曜日）を開いたり、卒業後も先生と学生のつながりは非常に強いですね。

ー栄養士を目指す人にアドバイスをお願いします

本学は60年の歴史ある大学です。そのため県内には、本学を卒業した栄養士の方々が数多く活躍されています。地元で就職を希望する場合は、もちろん地元の大学に進む方が有利ですし、両親の負担もかなり減らせます。また本学の先生方は熱心な方が多く、親身な指導を受けることができ、栄養士を目指すには良い環境だと思います。

古木 美香 先生　プロフィール

- 別府大学短期大学部食物栄養科講師
- 専門は臨床栄養学、栄養教育
- 川崎医療福祉大学医療技術学部臨床栄養学科卒、同大学大学院医療技術学研究科修士課程修了。修士（臨床栄養学）
- 南九州大学健康栄養学部助手として勤務の後、本学に着任。
- 小学校の頃から絵画教室に通い、陶芸やガラス工芸が趣味。中学時代はソフトテニス部。スポーツ観戦も好きで、大分トリニータのシーズンパスを持っているが、最近はもっぱらテレビで応援。山口県の両親とは広島カープの観戦にも出かける。

国際交流・がんばってます留学生

夏季国際セミナーの開催と韓国協定校の来学

今年（2013年）も７月10日から８月３日まで「夏季国際セミナー」が開催され、4ヶ国（韓国、台湾、ロシア、中国）13校から131名の学生・生徒、引率教員が参加しました。今回は日本人学生との交流を一層充実させましたので、参加者の満足度を更に高めることができました。期間中、参加校の一つ大田国際通商高校の李ボムソク校長が来学し、セミナーの様子を視察しました。李校長は、現在、日本語クラスが１クラスあるが、本学との交流を基礎に日本への関心を高め、クラス数を2倍にしたいと語っていました。

また、韓国の夏期休暇に当たる６月から８月にかけて、韓国の交流協定校から多くの学生・教職員が、海外研修の一環で本学を訪れました。６月28日には大邱科学大学校の学生・教員63名、７月16日には慶雲大学校の学生・教員44名、８月７日には東西大学校の職員21名が来学し、本学関係者と交流を行いました。慶雲大学校との交流では、本学の人間関係学科の学生が参加し、日本と韓国の福祉教育について意見交換を行いました。また、７月31日には韓国の幼稚園教員30名が来学し、日本の幼児教育についての研修を行いました。

国際セミナー生の茶道体験の様子

本学学生と交流する
慶雲大の学生

大学と短大の学生が海外研修を実施

本学では大学・短大ともに海外での研修を積極的に推し進めています。本年度も文学部、食物栄養科学部、短期大学部の８学科が海外研修旅行を企画しています。これらの研修は授業（「国際理解」など）として実施され、２単位ないし4単位が認定されています。

今年（2013年）の前期は、９月までに大学の史学・文化財学科がメキシコ研修（学生30名、教員２名／６泊７日）、発酵食品学科がタイ研修（学生８名、教員２名／３泊５日）を実施しました。学生たちはメキシコではマヤ文明の遺跡を見学し、タイでは現地の発酵食品工場で発酵麺の製造体験を行いました。大学の座学では学ぶことができない海外での体験は、今後の学習の貴重な糧となることと思います。

後期には、大学の人間関係学科が韓国、食物栄養学科がフランス、短大の食物栄養科が台湾、初等教育科・保育科・地域総合科学科が韓国において、それぞれ研修を行う予定になっています。

発酵麺の製造体験（タイ研修）

テオティワカン遺跡の見学（メキシコ研修）

留学生が弁論大会で受賞

2013年６月30日、別府市ニューライフプラザ多目的ホールにおいて、「第４回　女子留学生日本語弁論大会 大分県大会」がWFWP(国連NGO世界平和女性連合)留学生日本語弁論大会大分県実行員会の主催で行われました。

本大会には９名の女子留学生が参加し、本学からは、文学部国際言語・文化学科の秦燕さん、麗鈺曦さん、短期留学生の李慈英さん、朴多恩さん、アイナ ラハリナリヴォさん、別科のタイヤポーンさんの計６人が挑戦しました。

本学の参加者は担任の先生方と幾度も練習を重ね、大会に臨みました。その甲斐あって、最優秀賞に李慈英さん、優秀賞に秦燕さんが選ばれました。李慈英さんは「私の抱負～長続きできたこと。そして、これから～」をタイトルに、８年間続けてきた日本語の勉強の中で、日本人の友人のひと言から日本語を学ぶ意味と将来の夢を掴んだこと、秦燕さんは「私の日本留学生活～優しい日本人～」をタイトルに、日本語がまだ上手く聞き取れなかった頃のバイトでの出来事から、日本人の優しさに助けられてきたことを熱く語りました。今回初めて設けられた高校生審査員の投票でも、李慈英さんが会場審査員賞に選ばれました。今回の大会は、参加した彼女たちにとって心に残る有意義な経験となったことでしょう。

李　慈英さん

秦　燕さん

学生が小松明祭に参加

2013年８月14日に、竹田市宮城地区で行われた「小松明祭（こだいまつり）」に本学の史学・文化財学科の学生と外国人留学生合わせて９名が参加しました。この「小松明祭」は、盆の迎え火と虫追い行事を兼ねたこの地区の伝統行事で、本学は昨年から地域交流の一環で参加しています。祭りは、日中の明るいうちに地域の人たちと一緒に3,000本の空き缶を利用した松明をつくり、法面（のり）やあぜ道、道路に沿って設置をしました。この合間に、地域の方々と学生との交流会が催され、一緒に食事をするなど交流を深めました。

辺りが薄暗くなると、持ち場で点火の準備をし、午後７時に一斉に火を燈し、幻想的な風景を作り上げました。昨年は、「ガンバレ竹田」、「日中友好」など並べて松明で文字を作り、復興と友好への願いを託しましたが、今年は復興への第一歩と感謝を込めて1,000本の松明で「♨祝豊肥線全線開通」、「思いやり日本」という文字をつくりました。

大学としても、この祭りに今後も参加し、地域の人たちとの交流を深めていきたいと考えています。

3,000 本の松明

祭に参加した学生たち

いきいき別大生

バスケットボール部の活動

文学部　史学・文化財学科　3年
バスケットボール部　主将　野田　豪

別府大学スポーツ振興会は、体育会系の19サークルを擁しています。私たちのバスケットボール部も本会に所属しています。

バスケットボール部は日々大会に向けてベストなプレイが出来るように練習に励んでいます。部員は経験者のみでなく初心者も所属しています。全体の練習とは別に部員それぞれにあった個別の練習メニューも考えて、充実したサークル活動を行えるよう心掛けています。

練習以外では夏にキャンプを行ったり、忘年会を行ったりと、部内の交流を深めています。また、スポーツ振興会が主催するフレッシュマンキャンプやリーダーズトレーニングという研修旅行にも参加し、他サークルとの交友関係を広げています。

バスケットボール部の練習風景

弥次喜多倶楽部の活動

食物栄養科学部　食物栄養学科　3年
弥次喜多倶楽部　部長　有田　吏伽

皆さん、「東海道中膝栗毛」という滑稽本をご存じでしょうか？通称、「弥次さん喜多さん」と呼ばれる、江戸の人物が厄落としのためにお伊勢参りを思い立ち、行く旅の先々で騒ぎを起こす珍道中を書いたものです。

私たち文化会所属の弥次喜多倶楽部は、そんな弥次さん喜多さんみたいに自分たちの足で…という訳ではなく、車や電車を使って、年に数回、大分県内・県外問わず旅（旅行）をするサークルです。これまでに九州はもとより中国・四国地方にも足を運んでおり、昨年は太宰府天満宮に厄落としならぬ学業成就祈願に行きました。弥次さん喜多さんと違って、旅の最中は安全第一を心がけています。今年（2013年）の冬も旅行を計画中で、この計画をみんなで考えるのも、とっても楽しい時間となっています。

稲積水中鍾乳洞を訪れた時の一齣

オープンキャンパススタッフとして

文学部　人間関係学科　4年
河野　雅之

これまで3年間、全学オープンキャンパスに学生スタッフとして参加しました。今年（2013年）8月16日の第3回オープンキャンパスが私にとって最後の参加となりました。

当日は今年最後のオープンキャンパスということで、多くの高校生と保護者の方が参加されていました。

全学スタッフである私たちは、高校生の受付や誘導、各学科との連絡調整や昼食の準備などが主な活動内容であり、本格的に高校生と交流する機会はありませんでした。

しかし、キャンパス内を笑顔で歩く高校生や保護者の方を見ることができた時は、スタッフ一同嬉しくなりました。また、日頃お世話になっている大学のために力になることができ、良かったと思っています。

今年のこの後のオープンキャンパスは、各学科での開催となり、より専門的な講義や学科ツアーが催されます。全学はもちろん、学科でのオープンキャンパスもきっかけとなり、多くの高校生が別府大学に入学してくれることを期待しています。

スタッフとして参加でき、大変貴重な体験をすることができました。

2013年度オープンキャンパスの学生スタッフ

人間関係学科「別府BBS会」のボランティア活動

文学部　人間関係学科　2年
木村　典介

文化部人間関係学科学内のサークル別府BBS会は、現在1年生11名、2年生10名、3年生4名、4年生8名で活動しています。BBSとは「Big Brothers and Sisters Movement」の略称です。少年たちの兄・姉のような身近な存在として「同じ目の高さで」接しながら、少年たちの成長の手助けをする、更生保護を中心とした全国規模の社会福祉ボランティア団体です。法務省の機関である保護観察所などの支援・協力を受けながら、犯罪のない社会づくりのため各種の活動を行っております。

当会が行っているボランティアを紹介します。小学生を対象とした「WAKU② IN 上人」では、会員は児童にマンツーマン体制で対応しています。勉強の時間とお楽しみの時間を設けており、勉強の時間は児童が分からないところを会員に聞き、会員は児童が分かりやすいように教えます。お楽しみの時間は、レクリエーションや工作などをして楽しんでいます。

昨年度（2012年度）は、私たちの活動が評価され、日立みらい財団から「更生保護奨励賞」という栄えある賞をいただきました。今後も、様々なボランティア活動に参加していきたいと思っています。

「WAKU② IN 上人」の活動の様子

新任教職員紹介

① 所属　② 専門分野　③ 出身校　④別府大学の学生に一言

水野　時孝（ミズノ　トキタカ）

① 教授　国際経営学部　国際経営学科
② 租税法、国際課税
③ 東京外国語大学
④ 自ら視野を狭くしないで、大きな夢を持ってください。卒業することだけではなく、卒業してからのことも一緒に考えていきましょう。

織原　保尚（オリハラ　ヤスヒサ）

① 准教授　文学部　人間関係学科
② 法学、憲法学
③ 同志社大学大学院　法学研究科
④ 大学で学ぶ時期は、非常に直感が鋭い時期でもあります。我々と共に、いろんな事に興味を持ち、勇気を持って学習していきましょう。

甲元　隆則（コウモト　タカノリ）

① 講師　文学部　国際言語・文化学科
② アニメーション・映像制作、美術全般
③ 九州産業大学　芸術学部デザイン学科ビジュアルデザインコース専攻
④ 大学の中でもマンガ・アニメーションの専門分野がある学校は全国的にも珍しいです。別府大学はマンガ・アニメの技術的な部分だけでなく、制作プロセス等の勉強もできますし、その他にも、デザインや美術などマンガやアニメに必要なことが多岐にわたり学べます。アニメーションの授業に関してもアニメ制作のみならず、TVCMやWEBコンテンツの制作実習など、アニメだけではなく映像全般を対象としての講義を行います。将来、マンガ・アニメの業界に向かわずとも、いろいろな分野で活用できる能力を持っていただけるように頑張っていきたいと思っていますので、よろしくお願いいたします。

曾　怡華（ソ　イカ）

① 講師　文学部　国際言語文化学科
② 第二言語教育、中国語教育
③ 慶應義塾大学大学院　政策メディア研究科
④ 笑顔に笑顔の明日が来ますから、毎日楽しく過ごしてください。

石川　賀一（イシカワ　シゲカズ）

① 講師　文学部　司書課程
② 図書館情報学
③ 明星大学大学院　人文学研究科
筑波大学大学院　図書館情報メディア研究科（博士後期課程）
④ 大学生活は人生の中で最も時間に余裕がある時期です。多くの人たちや本とふれあえる絶好の機会です。その経験はかけがえのない財産となります。幅広く関心を持ち、いろいろなことにチャレンジしてください。

森　宗一（モリ　ソウイチ）

① 講師　国際経営学部　国際経営学科
② 経営学、経営戦略
③ 広島大学大学院　社会科学研究科
④ 自分には何があり、どのような環境に置かれているのか？ ということをじっくり考えると色んなことが見えてきます。良いことも悪いことも。時としてきついこともありますが、大学生活を通して、なりたい自分になってください。

豊浦　章治（トヨウラ　ショウジ）

① 准教授　短期大学部　初等教育科
② 教科教育（国語、生活）
③ 高知大学　教育学部小学校課程
④ 自分の願いの実現に向けた第一歩をこの大学生活から踏み出してください。

工藤　豊文（クドウ　トヨフミ）

① 准教授　短期大学部　初等教育科
② 教職教養
③ 鹿児島大学　理学部
④ それぞれの「夢」をあきらめずに頑張ってください。

岩本　貴光（イワモト　タカミツ）

① 講師　短期大学部　初等教育科
② 保健体育（剣道）
③ 筑波大学　体育専門学群
④「昨日の自分より成長した今日の自分」を目標にお互い頑張っていきましょう。

安部　えつ子（アベ　エツコ）

① 講師　短期大学部　初等教育科
② 芸術学（音楽）
③ エリザベト音楽大学大学院　器楽科クラリネット専攻
④ 大学時代というのは、社会に出るまでに力を蓄える貴重な時間です。
よい環境の中でよく学び、仲間を見つけ学生生活を充実させてください。

姫野　美子（ヒメノ　ヨシコ）

① 講師　短期大学部　地域総合科学科
② 情報処理
③ 九州大学　法学部　法律専攻
④ 多種多様な情報があふれる現代ですが、情報に振り回されるのではなく、自らが情報をコントロールすることによって、自らの意思で世界を広げることができます。一緒に楽しんで広げていきましょう。

寺嶋　友理（テラシマ　ユリ）

① 大学事務局　教務事務部教務課
短期大学部　食物栄養科　出向実験助手
③ 別府大学　食物栄養科学部食物栄養学科
④ 学生生活は今しかないので思いっきり楽しみ、目標を持って充実した学生生活を送ってください。

田中　美帆（タナカ　ミホ）

① 大学事務局　教務事務部教務課
食物栄養科学部　食物栄養学科　出向実験助手
③ 別府大学　食物栄養科学部食物栄養学科
④ 大学生活の４年間というのは、楽しいことがある反面、大変なこともあると思いますが、精一杯頑張ってください。

八坂　理子（ヤサカ　サトコ）

① 大学事務局　教務事務部教務課
食物栄養科学部　食物栄養学科　出向実験助手
③ 別府大学　食物栄養科学部食物栄養学科
④ やり残した…と思うことがない、学生生活を送ってください。

熊野　良一（クマノ　リョウイチ）

① 法人事務局　管理部管理課
③ 日本大学　経済学部経済学科
④ 在学中にいろんな経験をして自信を身につけてください。

高橋　敏（タカハシ　サトシ）

① 大学事務局　学生事務部　キャリア支援課キャリア支援マネージャー
③ 久留米大学　商学部
④ 学生の皆さんの就職活動に少しでもお役に立てるように頑張りますので、一緒に頑張りましょう。

渡邉　章（ワタナベ　アキラ）

① 大学事務局　入試広報事務局
③ 慶応義塾大学　商学部
④ 大学時代に一生懸命勉強した人はRICHになれます。
大学時代に多く友人が出来た人はHAPPYになれます。
一生懸命勉強し、多くの友人が出来た人はRICHになり、HAPPYになれます。
一日一日を大切に!!

学園News

2013年度事務職員研修会を開催

法　人

2013年5月30日、本年度の事務職員研修会をメディア教育研究センターで開催しました。

この研修会の目的は、事務職員に法人全体の学校の現状と課題を理解し、本法人の進むべき方向を認識するとともに、業務のスキルアップをはかってもらうことにあります。

特別企画として、キャリア支援センター佐藤敬子副センター長に『事務職員のための接遇の心得「心をいただき、気持ちを伝える接遇のコミュニケーション」～ここに来て良かったと思われる対応のために～』と題して、学生や保護者の応対にあたって特に配慮すべきことについて講演をしていただきました。

研修では、豊田寛三別府大学長から「別府大学の現状と課題」と題して、入学者の確保、認証評価の結果、教育研究発展計画の今後の計画など、多岐にわたる説明がありました。

続いて各附属学校の現況についての説明があり、最後に日高紘一郎理事長が「私学を取り巻く諸事情と学園の経営状況について」と題して、各学校毎の経営状況と教育再生実行会議の議論の内容などについて解説し、有意義な研修を終了しました。

佐藤先生の講演

日高理事長の講演

2013年度特別強化事業費助成金（別府大学GP）を決定

法　人

2012年度にスタートした学校法人別府大学中期計画では、教育研究等の推進に関する計画のうち、学生支援の充実、キャリア支援の充実を重点目標として掲げています。

本法人では、目標達成に向けた財政的な支援策として、昨年度に引き続き、2013年度特別強化事業費助成金（別府大学GP）を設け、学生支援事業に大学15件、短期大学部６件、合計21件の事業を採択しました。（下表）

また、科学研究費補助金の申請や学内共同研究など研究推進のための研究支援に、大学７件、短期大学部３件の事業を採択しました。

なお、2012年度に採択した学生支援事業（大学８件、短期大学部６件、合計14件）及び研究支援事業（大学６件、短期大学部２件、合計8件）については、５月15日及び29日に成果報告会を開催し、各事業担当者に成果を発表してもらい、活発に事業を展開していることが報告されました。

別府大学GP学生支援（大学）

No.	事　業　名	事業代表者
1	公務員試験対策講座の充実	利 光 正 文
2	教員採用選考試験【教職教養】受験対策講座	川 瀬 泰 治
3	学生の語学力向上支援のための環境整備	三重野佳子
4	学生の体験型学習を重視した地域連携教育プログラム事業	江 崎 一 子
5	人間関係学科国家試験対策プロジェクト	大嶋美登子
6	過疎市町村における高齢者の自宅でできるロコモティブ・シンドロームの予防法に関する事業	吉 村 良 孝
7	管理栄養士国家試験対策の充実	浅 田 憲 彦
8	別府大学生による料理コンテスト「学食メニューを考えてみよう」	平 川 史 子
9	発酵食品学科の新規開設である食品香料コースの充実化	岡 本 啓 湖
10	発酵食品学科「チーズプロフェッショナル」認定資格取得支援事業	髙 松 伸 枝
11	国際経営学部における地域貢献・産学連携教育事業	関 谷　忠
12	国際経営学部における産業界・高大連携事業	関 谷　忠
13	国際経営学部学生に対する各種資格取得支援事業	関 谷　忠
14	iPadmini-Moodle(CMS)を利用した学生出席情報確認システムの構築	大嶋美登子
15	学生支援事業「キャリア支援活動の充実」	利 光 正 文

別府大学GP学生支援（短大）

1	自主性及びコミュニケーション力向上のための学生支援事業	相 浦 雅 子
2	就職委員会による公務員を目指す学生のための試験対策事業	仲嶺まり子
3	日本人学生と留学生がともに学び、ともに成長する地域貢献・国際理解・企業との連携プロジェクト	八 幡 雅 彦
4	学習意欲向上のための地域食育活動プログラム	立 松 洋 子
5	豊かな人間性と実践力を育む課外活動の充実	佐 藤 慶 子
6	初等教育科・保育科造形展及び関連行事	佐 藤 慶 子

卒業生の深堀優紀さんがプロ漫画家デビュー

国際言語・文化学科

2010年度に本学科マンガ・アニメーションコースを卒業した深堀優紀さん（ペンネーム：フカホリユウキ）がマンガ雑誌デビューを飾りました。『別冊コロコロコミックSpecial』10月号掲載「超絶戦略 イチゲキP」（43ページ）。深堀さんは昨年12月、「第71回小学館・新人コミック大賞」の児童部門で入選を果たしていましたが、今回プロ漫画家への第一歩を踏み出したことになります。

また小学館主催学生マンガ賞「クラサン杯」では、久保田由佳さん（平成25年3月卒業）が、卒業制作作品『黄金色の』で激励賞を受賞。本学学生の受賞は、一昨年の藤田幸恵さん（激励賞）、昨年の藤本一茂君（全国第1位）に続き、３年連続という輝かしい結果になっています。

※「クラサン杯」
全国のマンガ専攻を持つ大学、専門学校からの推薦でエントリー作品が決められる公募マンガ賞。今回は23校より37作品が参加。

深堀優紀さん「第71回小学館・新人コミック大賞」入選作『ー超!!プロデューサー伝説ー太陽』

久保田由佳さん「クラサン杯」激励賞『黄金色の』

中津の史跡見学と史学研究会大会の開催

史学・文化財学科

2013年5月11日に、１年生の第二次オリエンテーションを実施し、耶馬溪と中津の史跡見学を行いました。羅漢寺登りは大変でしたが、爽快感を味わうことができました。

また、6月22日には、史学研究会大会と高校生向けセミナーを同時並行で開催しました。今年は史学・文化財学科の前身である史学科および史学研究会創立50年目に当たり、後期に記念大会を予定していますが、今回の大会では卒業生による研究報告を行いました。

報告は日本の江戸時代の庶民生活に関するもので、在学生ももちろん多数聴講しましたが、今回は高校生にも報告を一部聞いてもらいました。その後、高校生には改めて詳しくかみ砕いてレクチャーを行い、歴史研究の一端に触れてもらいました。

史学研究会大会の様子

中津（耶馬溪）での史跡見学

学園News

出合い～つながる
(新入生第2次オリエンテーション)

人間関係学科

大学生活を有意義に過ごすためには、まず信頼できる友や教員と出合うことが重要です。人間関係学科では、その出合いの場として、新入生を対象に毎年５月、住吉浜リゾートパークで１泊２日の研修旅行を実施しています。当日の企画・運営は、４年生のサポートを受けながら１年生が行います。今年度（2013年度）は、ドッヂボール・バーベキュー・イチゴ狩り・花火などの企画が満載でした。自主的な協働作業を通じて、学生同士の絆は深まります。夜は、小グループに分かれ、講義やアルバイトなどについて《言いたい放題》のディスカッションを行います。第２次オリエンテーションは、別府大学で出合い、つながることの楽しさ、喜びを体験する機会となっています。

ドッヂボールの様子

味噌作りを通しての栄養教育（食育）体験

食物栄養学科

2013年５月14日、食物栄養学科１年生が「栄養教育論実習」の授業で附属幼稚園の年長組園児と味噌作りを行いました。

まず学生が「大豆の栄養素」や「大豆の加工食品」について劇形式で話をし、授業担当の浅田憲彦准教授が味噌作りの方法について「電子紙芝居（スライド）」により説明しました。以下は味噌作りの過程です。

① 園児に茹でた大豆を真空パックにしたものを１袋ずつ渡し、大豆を袋のまま潰す。
② 塩と麹を混ぜあわせると同時に麹の香りをかぐ。
③ つぶした大豆と塩きり麹をよく混ぜあわせ、味噌玉を作る。
④ 味噌玉でひとりキャッチボールをし、瓶に詰める。

この味噌は園児の夏のキャンプや冬のだんご汁作りなどに使われます。

次年度は自ら栽培・収穫した大豆で実施しようと考え、６月下旬に年中組園児と種植えをしました。次年度の味噌作りが楽しみです。

味噌作りの様子

九州学生本格焼酎プログラム講演会を開催

発酵食品学科

2013年５月24日、発酵食品学科の全学年を対象に、九州学生本格焼酎プログラム（QSP）講演会を開催しました。QSP講演会は九州特産の本格焼酎の製法や歴史、さらに本格焼酎の効用について知識を深めることを目的とし、今回が４回目で、大分県では初の開催となります。

当日は、別府大学の段上達雄教授による講演「焼酎の歴史―新たな評価と文化への影響―」、武庫川女子大学の木下健司教授による講演「アルコールの体質検査と飲酒の功罪」、焼酎メーカーによる企業発表が行われました。木下教授のアルコール感受性を決める遺伝子の話と体質検査には、多くの学生が関心を示し、パッチテストの結果に一喜一憂していました。

QSP講演会の様子

経営戦略を肌で実感！
～ブリヂストンとアウトレットを見学～

国際経営学科

2013年5月30日、国際経営学部１年生が企業の経営戦略を肌で実感することを目的に、鳥栖プレミアム・アウトレット（佐賀県）とブリヂストン久留米工場（福岡県）の見学を行いました。

鳥栖プレミアム・アウトレットでは、多くの著名ブランド商品を安い価格で販売する経営戦略を目の当たりにしました。特に屋外に設けた開放的な店舗のスペースが購買意欲にどのような影響を与えているかについて関心が集まりました。

ブリヂストン工場では、あまり知られていないタイヤの複雑な構造について学んだほか、昨年12月に誕生した安倍晋三政権が打ち出した経済政策「アベノミクス」が、経営にどの様な影響を与えたかについて質問が寄せられました。

ブリヂストン工場で経営戦略を学ぶ学生ら

学園News

日本料理講習会を開催

食物栄養科

2013年６月30日、短期大学部食物栄養科が、短期大学部創立60周年記念行事の一環として、「日本料理講習会」を開催しました。講師として東京築地の料亭「つきぢ田村」の田村隆先生をお招きし、「未来へ続く日本料理」と題して調理実習や講演会を行いました。

一般の受講生や学生スタッフたちは、日本料理の基本を踏襲しながら斬新なアイデアを盛り込んだ料理の数々に感動し、舌鼓を打ちました。先付は白和えにブルーチーズを加えた「夏野菜白アウェイ」、椀物は食パンを使った「甘鯛パン茶巾」など、洋風食材を日本料理に利用するコツをご指導いただきました。

食事会は、小風茂大分県副知事をはじめとする県職員の方々にもご出席いただき、60周年を祝う盛大な会食となりました。学生たちにとっては、先輩との交流も行われ、過去と未来をつなぐ講習会となりました。

講習会の様子（右から2人目が田村先生）

志茂田景樹の読み聞かせ講演会を開催

初等教育科

2013年６月22日、別府大学短期大学部創立60周年記念事業の一環として、「児童学会講演会」が学生対象と一般市民向けの二部に分けて大分キャンパスで開催されました。児童学会は、初等教育科・保育科の職員、学生、卒業生等によって構成される、幼児・児童の教育や福祉の問題を広く研究することを目的とした会です。

60周年という記念すべき年にあたり、斬新な服装でテレビのバラエティ番組などで活躍する一方、ボランティア活動で児童文学の普及に努めておられる直木賞作家志茂田景樹氏による「絵本読み聞かせ講演会」を開催しました。氏は自作・画の絵本「ぽんちとちりん」・「ちいさなちいさなぞうのひみつ」等の作品を、作者ならではの読み聞かせぶりで語り、参加者に深い感動を与えました。

読み聞かせを行う志茂田氏

留学生が日本語スピーチコンテストで活躍

地域総合科学科

2013年７月24日、「2013年別府大学留学生日本語スピーチコンテスト」が開催され、地域総合科学科２年生の穆園園さん（中国）が最優秀賞、李林波君（中国）が優秀賞、ハサンタ・ピリース君（スリランカ）が審査員特別賞を獲得する活躍を見せました。

最優秀賞に輝いた穆さんは、「日本の庭から見えたもの」と題するスピーチの中で、いかに日本人が小さな空間を利用して植物を調和よく育てているか、いかに日本人がものの命を大切にしているかということを流暢な日本語で語り、数多くの聴講と審査員の心を捉えました。穆さんは別府大学代表として11月16日に行われる「平成25年度OITA学生提言フェスタ・スピーチコンテスト」に出場することになりました。穆さんの健闘を祈っています。

左より李君、穆さん、ピリース君

わんぱくこどもまつりを開催

保育科

2013年７月20日に、保育科1年生が植田公民館にて「わんぱくこどもまつり」を開催しました。これは、植田公民館における子育て支援事業の一環として、保育科１年生が企画の段階から携わり、公民館と共同で運営しているイベントです。

この日は、公民館全館をいろいろなコーナーに作っていきます。公民館１階の集会室には、乗れる車や魚釣り、サッカーゴール、ポンポンプールにレインボートンネル。２階の部屋では、リズムダンス、絵本の読み聞かせとパネルシアター、うちわ作り、バルーンアート、手作りおもちゃ、スライム等々、盛沢山でした。ウキウキパレードを踊るオープニングから学生手作りのお土産をもらうエンディングまで、約120組の親子が参加してくれました。

わんぱくこどもまつりの様子

学園News

卒業生との懇談会を開催

附属看専

2013年７月20日、『卒業生との懇談会』を実施しました。この会は、先輩の経験を通して専門職業人としての看護師の役割を知る、進路選択の参考にする、国家試験対策に役立てることなどを目的に、臨床で活躍している卒業生を招いて講話を聴くという会です。

今年は卒業後１年目・５年目・15年目など、様々に経験を積まれている４施設の卒業生をお招きしました。卒業後１年目から問われる看護実践力、患者のみならずスタッフとの人間関係の構築、報告・連絡・相談の重要性、そして向上心を持ち続けることの重要性について、各先輩方の経験を通した話が熱く語られました。中でもコミュニケーションの不得手から報告・相談ができず、業務の遂行が困難であったが、上司や先輩の指導・助言により一歩一歩前進していることに感謝しているという講話に、学生は自分の将来を重ねていました。そして、コミュニケーション力の向上とともに、エビデンスを追及する姿勢を身につけることが大切であると心に刻んだようでした。

卒業生に感謝の花束贈呈

イングリシュファンファンデーを実施 ～「明豊中学留学」でALTと共に楽しく～

明豊中学

明豊中学は教育の一環として、ネイティブティーチャーとともに英語学習のティームティーチングを実施しています。今年（2013年）6月10日、総合学習の時間を利用し、“半日英語デー＝「明豊留学」”（英語しか話してはいけない日）という企画を実施しました。本校のALTのパトリック先生が進んで協力してくれ、大分県内の友人にお友達ネットで呼びかけていただきました。お陰で当日は大分県内ALT大集合といった感じで、総勢10名のネイティブティーチャーに集まっていただきました。

最初の自己紹介からもちろん英語です。アイスブレーキングを通してネイティブの皆さんと打ち解けると、2人1組の5ブースに分かれて、「お国自慢クイズ」・「楽しいクイズ」・「英語でレクリエーション」などを実施しました。あっという間に時が過ぎたといった感じで、中学生にとって大変楽しく有意義な経験でした。

イングリシュファンファンデーの様子

附属幼稚園児が味噌作りに挑戦

附属幼稚園

2013年５月21日、食物栄養学科の浅田憲彦准教授のご指導で、学生と年長児43名で味噌作りを行いました。この味噌作りは今年で３年目になります。前年度、前々年度の年長児が作った味噌の味も合わさっているので附属幼稚園伝統の味噌作りとなりつつあります。

学生に味噌は大豆からできること、大豆から様々なものが作れることなどを、絵や劇を通して分かりやすく教えてもらい、子ども達は味噌作りへの期待がさらに膨らみました。作る手順や約束ごとを教えてもらい味噌作り開始です。

作った味噌は保育室に置いてあり、子ども達は日々変わっていく匂いや色の変化に気が付きながら過ごしています。また、7月20日～21日に行われた子どもキャンプでは、この味噌をキュウリにつけたり、味噌汁に入れたりして食べました。今後も、森での大鍋パーティーや給食参観日で、保護者にも食べていただく予定で、楽しみがさらに増えていっています。

園児による味噌作りの様子

福岡・長崎・熊本で同窓会支部会を開催

同窓会

今年度（2013年度）も別府大学同窓会福岡県支部会、長崎県支部会が７月6日に、熊本県支部会が７月13日に開催されました。

各支部会では３年前から支部会参加の卒業生に大学の新しい学問分野を知っていただくために、懇親会に先立って記念講演を実施してきました。昨年からは、卒業生の意見も踏まえて記念講演を一般に開放する公開講演にいたしました。

今年度は、福岡県支部会においては、史学科平成４年卒業で宗像市世界遺産登録推進室主任技師の岡崇氏による『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産登録へ』、熊本県支部会では、豊田寛三学長による『熊本藩豊後領鶴崎と諸問題』と題しての講演が行われました。共に興味深い内容で、みなさん熱心に聴講していました。

公開講演終了後は懇親会に移り、本部同窓会役員、教員を含めて各会場とも20～30名が参加し、終始和やかな雰囲気で歓談が繰り広げられました。卒業生の中には定年間際の方も多く、大学に何か恩返しがしたいという申し出がいくつもありました。

長崎県支部会の参加者

平成24年度学校法人別府大学の事業報告(抄)

Ⅰ 経営基盤の強化

1. 中長期的な経営戦略の実施

経済情勢をはじめ私学を取り巻く環境が極めて厳しい状況の中で、教育研究活動や社会貢献活動を持続的に発展・強化させるためには、目指すべき将来像の実現に向けた中長期的な経営戦略を明確に示し、それに基づく教育研究や法人運営を推進し、地域社会との連携強化を図っていくことが重要です。

学校法人別府大学では、経営基盤を強化するため、中長期的な経営戦略として「学校法人別府大学中期計画」(5ヶ年、平成24年度から平成28年度まで)を、平成24年4月にスタートさせました。

2. 教育研究施設設備の充実

施設の現状として、本学校法人が保有する建物面積約8万8千㎡のうち昭和56年以前に建設された旧耐震基準の建物が約3万6千㎡あり、耐震補強の検討が必要です。また、教育研究設備に関しては、一部老朽化、陳腐化が進み、必要とする設備の不足も含めた現状把握が必要となっています。

そこで、学校法人別府大学では、教育研究の将来的なビジョンを踏まえたキャンパスの整備や教育研究設備の充実に向け、平成24年4月に学校法人別府大学施設・設備マスタープラン検討委員会を発足させ、耐震補強・機能改善に向けた整備を優先させる第一次計画(7ヶ年、平成24年度から平成30年度まで)を策定しました。折しも、施設設備の整備に関し、政府の積極的な財政出動による補正予算が組まれたことで、一部の計画を前倒しして、2件の補助事業を申請し、交付決定を受けることができ、経済的負担の軽減も図ることができました。

Ⅱ. 事業の概要

1. 大学・短期大学部

高等教育の質の保証を図るため、教育課程、カリキュラムの再編、大学の管理運営体制の見直し等について、これまでの改革を引き続き推し進め、特色ある魅力的な大学づくりに取り組んでいます。平成24年度から始動した5ヶ年計画「教育研究発展計画2012-2016(別府大学未来へのアプローチ)」においては、大学のミッション(使命)を「教育」「研究」及び「地域貢献」の三つにまとめ、更に、それらを実現するための五つのビジョン(目標・大学像)と十の重点目標を掲げ、年度ごとの具体的な行動計画を定めました。

大学においては、平成25年4月から食物栄養科学部発酵食品学科に新たに食品香料コースを設け、学芸員資格及びフードサイエンティスト資格が取得できるようになります。また、国際経営学部国際経営学科の専門科目について、実務能力を確実に修得させるため教育課程の一部見直しを行いました。また、入学者の減少に対し、短期大学部では、平成25年度以降の地域総合科学科の学生募集活動を停止することを決定しました。

なお、別府大学及び別府大学短期大学部は、それぞれ平成24年度に公益財団法人日本高等教育評価機構による大学機関別認証評価及び一般財団法人短期大学基準協会による機関別認証評価(第三者評価)を受け、平成25年3月に、大学においては「大学評価基準に適合している」と判定され、短期大学部においては「本協会が定める短期大学評価基準を満たしていることから、適格と認める」と認定を受けました。

(1) 教育目標の明確化とカリキュラムの最適化
- ① 大学においては、平成23年度に改定した教育目的に合わせて見直した入学者受入方針(アドミッションポリシー)、学位授与方針(ディプロマポリシー)、教育課程編成・実施の方針(カリキュラムポリシー)を、平成24年度から施行しました。また、大学・短期大学部ともに、教育目的や学位授与方針等を平成24年度学生便覧の『学生生活』に明示し、学生と教職員が共有しました。
- ② 短期大学部においては、カリキュラムツリーを作成して、カリキュラムの順次性・体系性を明確にしました。

(2) 授業の改善と教育システムの改革
- ① 平成24年度に作成した自己点検・評価報告書の中で、授業内容の順次性・体系性等について自己点検・評価を行うとともに、課題に対して改善計画を明確化しました。
- ② 短期大学部では、シラバスにおいて、各科目の到達目標・学習内容を具体的で測定可能な記述に統一しました。
- ③ ミニッツペーパーを導入し、学生の学習理解度を把握するとともに、学生の意見や希望を速やかに授業改善に生かすよう努めました。
- ④ 教育の質を保証するため、望ましい教養教育を考える、協同学習を体験する、高大連携、キャンパスハラスメント等をテーマにしたＦＤ(ファカルティ・ディベロップメント)研修会や授業公開を実施しました。
- ⑤ 学生の意見を授業改善に反映させるため、学生による授業評価アンケートを実施し、これに基づいて全教員の「授業改善プラン」を取りまとめて刊行・公表しました。
- ⑥ 短期大学部では、学生の主体的な学習を確立させるため、学習ポートフォリオを導入しました。また、大学・短期大学部ともに、「大学以外の教育施設等における学修の単位認定に関する規程」等を見直し、各種資格・検定試験を単位として認定することとしました。
- ⑦ ＧＰＡを基に卒業生の中から各学科1名の成績優秀者を選定し、卒業式において表彰しました。
- ⑧ 新入生に対し、第2次オリエンテーションや導入演習などにより初年次教育を充実しました。

(3) 学生支援の充実
- ① 学生が相談しやすい環境を作るため、教員に個別相談できるオフィスアワーの時間を設け、各研究室に掲示し、クラス担任、研究会顧問、学科担当、就職担当などがそれぞれの立場から重層的に相談に応じるよう工夫しています。
- ② 大学・短期大学部共同で『学生指導ハンドブック(学生がいきいきと就学するために)』を作成し、4月の合同教授会で配布し、学生指導に関する情報の共有を図りました。
- ③ 心理的な問題を抱える学生の対応のため、非常勤の学生相談専門員(臨床心理士)を学生相談室に配置し、また「発達障がい学生の理解と支援」をテーマにＦＤ研修会を開催しました。
- ④ 保護者との懇談会を本学及び地方会場で実施したほか、成績不良者や欠席日数の多い学生の保護者には、各学科の担任が連絡を取り、必要に応じて三者面談を行いました。
- ⑤ 学園祭に合わせてホームカミングデーを設け、同窓会と協力して同窓生の母校訪問に取り組みました。

(4) キャリア支援の充実
- ① 学科専門に応じたキャリア教育の考え方を明確にし、指導を行いました。
- ② 教育課程の中に1年次にキャリア教育Ⅰ、2年次にキャリア教育Ⅱ、3年次にインターンシップを置くほか、全学年を通してキャリア形成のための実践力を培う総合ゼミを開設し、就職に結びつく体系的なカリキュラムを実施しました。また、インターンシップに関しては、学科の教員や担任が実習受入先の開拓や実習中の指導を協力して行い、希望者全員がインターンシップを受けられるよう努めました。
- ③ キャリア支援センターを利用する学生が大幅に増加していることに対応し、専任のキャリアカウンセラーに加え、非常勤のキャリアカウンセラーを週2回配置し、学生の進路相談、面接指導等を充実させました。また、キャリアカウンセラーの資格取得を目指す職員の資格研修支援にも努めました。
- ④ 全学生の就職活動状況をより正確に把握するため、就職委員会と協力し、情報共有に努めるとともに、就職情報についても最新の情報を入手し、いち早く学生に還元できるよう周知を徹底しました。

(5) 国際化への対応
- ① 韓国の大邱科学大学(交流協定校)主催の国際交流セミナーに大学7名・短期大学部3名の学生が参加し、海外の学生との交流を深めました。また、規程を改正し、「実用英語技能検定」「実用フランス語技能検定」「ＴＯＥＩＣ」「ＴＯＥＦＬ」を本学における学修と見なして単位を認定できるようにしました。
- ② 韓国の龍仁大学校、金鳥女子高校、江北高校、嶺松女子高校及び利賢高校、中国の江蘇信息職業技術学院と交流協定を締結しました。また、夏季・冬季の国際セミナーを実施し、海外の交流校等からの受講生に対して日本語、日本文化等の理解を深める活動を実施しました。
- ③ 卒業生とのつながりを大切にするため、別府大学同窓会に働きかけ、台湾支部に続いて韓国支部を設立しました。
- ④ キャリア支援センターが中心となり、留学生対象の就職説明会に学生を引率するなど、留学生の進路相談、情報提供に努めました。
- ⑤ 留学生・日本人学生及び市民との交流のため、「国際交流ゆかたの夕べ」を近隣の自治会などの共催で実施しました。

(6) キャンパス・学習環境の改善
- ① 『防災ハンドブック』『災害対策マニュアル』を作成し、学生・教職員に配布するとともに、平成24年11月28日に全学一斉の防災避難訓練、消火訓練を実施しました。
- ② 毎月1回、学生委員会と学生有志による防犯パトロール隊を編成し、大学周辺のパトロールを実施しました。

(7) 研究活動の強化
- ① 防災シンポジウムや大友遺跡に関するシンポジウム、日本人と旅に関するシンポジウムなど学部・学科の垣根を越えた討論会を開催しました。
- ② 図書館において、電子ジャーナルの充実、機関リポジトリの整備に努めました。
- ③ 意欲的な研究を支援する学内の仕組みとして、学生支援ＧＰに続き、平成24年度から新たに研究支援ＧＰ(申請・採択方式)を創設し、大学8件、短期大学部2件の研究企画を採択しました。

(8) 地域貢献の充実
- ① 本学独自の企業説明会に参加した企業や、卒業生の就職先や卒業生にアンケートを実施し、求める人材の要素や在学中に学習するべき内容等、企業ニーズの把握に努めました。
- ② 大学では、別府大学公開講座(計12回)、食物栄養学科の親子料理教室、日田歴史文化研究所の日田歴史文化講座、文化財研究所の文化財セミナー、司書講習の現職の司書を対象にしたスキルアップセミナーを開催し、短期大学部では、食物栄養科の管理栄養士講座や同科卒業生による保育所栄養士研究会等のリカレント教育、幼児児童教育研究センター主催の講演会、保育科学生による大分市植田公民館での「わっしょい！ 子ども夏まつり」などを開催しました。
- ③ 学生主体の活動では、大学では、夢米棚田チームによる米づくりプロジェクト、学生による地域防犯パトロールの実施、別府冬粋祭での学生と障がい者による共同ボランティア、大分県小児糖尿病サ

マーキャンプへの参加などを行いました。短期大学部では、由布市挾間町のきちょくれ祭りや大分市の夢音楽祭などに協力し、特に食物栄養科の女子学生グループ「育ドル娘」は保育現場等で人気が高く、その活躍が大きく報道されました。また、平成 24 年度北部九州豪雨の際には、約 50 名 (教職員含む) の災害ボランティアを計 3 回竹田市に派遣しました。

④　自治体等との研究連携として、食物栄養学科・発酵食品学科の受託研究が計 6 件、文化財研究所の受託研究が 14 件、附属図書館の受託事業が 1 件行われました。

⑤　各教員の研究・創作活動等を活かした地域貢献としては、古墳等文化財調査への協力、第 3 回「大分ユーモアまんが大賞」の実施、料理教室や健康教室の開催など各地で多種多様な活動を展開しました。

⑥　大分高等教育協議会及び大学コンソーシアムおおいたに加盟し、他の加盟大学とともに教育、地域研究、留学生支援などで連携を図りました。

⑦　平成 23 年度に行われた地域貢献活動を『地域連携・社会貢献資料集』として 5 月に刊行し、ＰＲに努めました。

(9) 広報活動の強化

①　『教育研究発展計画 2012-2016』の策定、教育目的と 3 つの方針の改訂など、大学の個性や教育の特色を分かりやすく整理する取組を進めるとともに、各学科の教育・研究の特色を周知するため、ホームページのトピックスや、『Be -News』『別府大学ニュース』の「特集」「教育Close Up」「研究者インタビュー」欄に積極的に掲載しました。

②　大学の名称とロゴをつけたルーズリーフ、懐中電灯、色鉛筆とメモ帳のセットの 3 種類の大学グッズを作成し、オープンキャンパスや来訪者へのプレゼントとして活用しました。

③　ホームページについては、閲覧者が見やすく、より興味を示すようにポータルページの改訂版を作成するとともに、学生や教職員の視点を反映させるため、動画配信のシステム構築とそのための条件整備を図りました。

④　『大学案内』を全面的に改訂し、学生募集の戦略広報誌としての本質を強化することに努めました。この他、就職情報に関して、『別府大学の就職状況』『別府大学短期大学部の就職状況』の 2012 版を作成し、また、保護者・教師用の大学案内冊子『大学進学の手引』を作成し、高校訪問などで活用しました。

(10) 管理運営体制の改善

①　学部長、大学評議員の選挙関連規程を見直し、必要な規定を整備し、4 月から施行しました。

②　職員の資質向上を図るため、新任教職員研修会 (4 月)、事務職員研修会 (5 月)、大学・短大新任教職員研修会 (6 月) などを実施したほか、教職協働の観点からＦＤ研修会をＳＤ研修会の場と位置付け、毎回 20 人程度の事務職員が参加しました。さらに、日本私立大学協会等が主催する各種研修会や県内大学合同若手職員研修会にも参加しました。このほか、ＯＪＴ手法によるＳＤ活動として、各課に「業務改善研究会」を設置し、職員からの積極的な提案に基づく業務改善計画を作成し、業務改善を図りました。

③　『教育研究発展計画 2012-2016』を着実に実施するため、大学企画運営会議 (大学)、学科長会議 (短期大学部) を基幹組織とし、行動計画ごとに実施担当組織を明確にし、これらの組織体制によって計画の実施に努めました。また、ＰＤＣＡサイクルによる計画の進展に努め、平成 24 年度報告の作成を反映させた平成 25 年度計画を作成しました。

2. 附属学校

(1) 明豊中学校、明豊高等学校

①　教師力の向上

校外の各種研修会への参加や、校内で教科毎に年 2 回行う研究授業等により、互いの教科指導や授業のスキルアップを図り、教師力 (生徒が本来持っている能力を引き出し、その能力を伸ばす力。) 向上に努めました。

②　中学校と小学校の連携と一貫教育

総合的な学びの場として、小学校と中学校の 9 年間の連続した学びの中で、基礎・基本に支えられた確かな学力を培う一貫教育を実施するために、教育課程や指導方法等を検討しました。

③　学力向上対策

高等学校普通科の選抜進学クラスでは、土曜日を活用した基礎・基本対策による学力向上を図ったほか、家庭学習記録表を活用した生徒本人と家庭との連携強化や、進路講演会や卒業生との懇談会等の開催により、進路意欲の向上を図りました。

総合進学クラスでは、学習に対する自信をつけることを目的として、基礎学力診断テストを実施し、努力した結果が数値として表れる等の工夫を行いました。また、別府大学との連携を図り、情報・経営コースを充実させ、特に簿記検定前には特別講義として別府大学国際経営学部で学ぶ機会を設けました。

この結果、別府大学へ 21 名、別府大学短期大学部へ 8 名、その他、上智大学・明治大学・法政大学・関西学院大学・西南学院大学などの私立大学又は私立短期大学へ 78 名、千葉大学・岡山大学・広島大学・九州大学・熊本大学・大分大学・宮崎大学・琉球大学などの国公立大学又は国公立短期大学へ 16 名が合格しました。

中学校では、国語・数学・英語の時間数を多く割り振り、特に英語の授業で 1 年次から外国人教師と英語教員とのチームティーチングを週 5 時間程度とし、英語学習の強化を図りました。

看護専攻科では、対外模試や勉強合宿を通して看護師国家試験対策を行い、96.2%(全国平均 88.8%) という高い合格率をあげました。

④　部活動・学校行事・国際交流の充実

文武両道の方針のもと、学業のみならず、部活動も学校生活の両輪の一つと位置付け、部活動の活発化に努力しました。また、文化祭・体育大会・遠足・クラスマッチ・修学旅行・宿泊研修等の学校行事を通じて、社会性や豊かな人間性を育みました。国際交流では、国際情勢の関係で困難が生じましたが、韓国の姉妹校訪問や、別府大学サマーセミナーに参加した韓国、台湾の生徒との交流の機会をもつなど草の根交流を行い、親睦を深めました。

⑤　生徒指導対策

全職員で服装指導を行い、生徒の服装に改善が見られました。

ＰＴＡと連携し、登下校指導、交通安全指導、校外指導を行うとともに、基本的な生活習慣や社会規範意識の確立を図りました。

「明豊パトロール」を年間 19 回行い、早朝の挨拶運動や交通安全指導に取り組みました。

⑥　進路指導対策

職場体験学習や、別府大学の教員や企業家等の社会人を講師とした進路講演会やキャリアガイダンスの開催により進路に対する意識の向上を図りました。

英語検定、漢字検定、ワープロ検定等の資格取得を実現しました。

別府大学との相互情報交換を緊密に行い、別府大学及び別府大学短期大学部への進学数が増加しました。

⑦　生徒募集対策

入試広報室を充実させ、県内小中学校との緊密な連絡調整を行うことで、本校の教育実践を理解してもらいました。

学校説明会やオープンキャンパスにおいては、魅力ある募集案内を工夫し、広報誌の作成や新聞社をはじめマスコミへの情報発信も強化しました。

看護科及び看護専攻科では、出身中学への訪問活動やポストカードを使った近況報告などにより、本校へ入学を希望する生徒や保護者のニーズに応えました。

(2) 明星小学校

①　学級担任と教科主任が協働し、授業実践に基づく特色あるカリキュラム作りに取り組みました。

②　生きる英語力を身につけさせるため、1 年生から 6 年生まで週 2 時間のカリキュラムに沿った英語の学習を実施し、指導にあたっては、外国人の専任講師と日本人英語講師を配置し、分かりやすく楽しい学習を展開しました。

③　国語はすべての教科の基本であり、学ぶ力の背景であるという考えから、学習時には「聴く力」を大事にし、「朝の読書タイム」や保護者の「読み聞かせ」を取り入れました。

④　教師の専門的な資質を向上させるため、全ての教職員が教室を開き、1 年間に最低 1 人 1 回の公開授業とその実践記録を作成しました。

(3) 附属幼稚園

①　平成 23 年度発行の「教育課程・指導計画」をもとに、「幼児らしさを大切に自主性を育む」保育を推進しました。

②　森の活用や園内の自然環境を生かした保育の充実に努めました。

③　幼稚園バスを活用し、別府の大自然を取り入れた園外保育を実施しました。

④　経営や保育に関する 18 項目の保護者アンケートを実施し、集計結果を公表しましたが、教育内容について理解と支持をいただいている手応えを得ました。

⑤　別府大学短期大学部初等教育科及び専攻科初等教育専攻、別府大学大学院臨床心理学専攻、別府大学附属看護専門学校、明豊高等学校看護専攻科の実習生を受け入れ、幼児教育について指導しました。

⑥　「人やものとのかかわりを深める子どもを目指して」をテーマに園内研修を進め、事例研究を深め、幼児児童教育研究センターレポートに執筆し、幼稚園研修録を作成しました。

⑦　九州地区園長研修会佐賀大会で園長が、大分県私立幼稚園教師研修会及び九州地区教師研修会沖縄大会では教務主任が実践発表を行い、幼稚園教諭初任者研修会、幼稚園 10 年経験者研修会の講師を主任教諭が務め、教育や研究の成果を発表しました。

(4) 明星幼稚園

①　「受け入れられて」「ひびき合う」「自らあゆむ」園児の姿を目指し、3 年間を見通した教育活動に取り組みました。

②　登降園や給食時などには、「祈り」の時間を設け、感謝する心、ともに生きる精神を育みました。

③　年中、年長組では、週に 1 回、外国人の専任講師による英語活動を実施し、歌やゲームを取り入れた楽しい英語活動を展開しました。

④　明星小学校との併設を生かし、学期ごとに明星小学校の児童との交流活動を行い、ダイナミックな遊びや教室での知的活動を楽しみました。

⑤　旧園舎の耐震工事、園内に 5 台の防犯カメラ、機械警備システムの設置等、防災・防犯に関する整備が完了しましたが、目視による安全指導を第一に、今後も園児の安全確保に努めます。

（5）附属看護専門学校

① 国家試験全員合格のための対策として、全日制・通信制が協力し、模擬試験や出張講義を取り入れ、自宅学習期間も全員登校学習とし、クラス担任が全期間において個別指導に尽力しました。

② 魅力ある看護師養成施設を目指し、各教員は、ＦＤ研修会への参加、ＳＤ研修会の実施による教育力の強化、資質の向上を図りました。

③ 応募者数・受験者数の確保を図るため県内外の准看護師学校と緊密な連携を図りました。

④ 通信制課程は、平成 16 年 4 月に全日制課程の付帯教育事業として、入学定員 150 人、総定員 300 人で開設しましたが、入学者が減少し続け、平成 24 年度は学生数が 116 人となり、検討の結果、平成 25 年度以降の学生募集活動を停止することを決定しました。

（6）境川保育園、春木保育園

① 保育の質の向上を目指し、日々の職員会議の中では、保育の振り返りに取り組み、また園外研修会へ参加した場合は、参加者の報告を取り上げて、全職員の学びに展開できるよう努めました。

② 各年齢の発達と一人一人の発達を大切にしながら遊びの発展を見通した環境作り、生き生きと遊びながら、豊かな感性・自発性・自立心が育つ環境作りに取り組みました。

③ 芋畑での交流、祭りへの参加、保育園行事への招待など地域とのつながりを充実させる一方で、園外の子どもたちの遊びの場として園庭を開放し、地域の子育てにも力を注ぎました。

3．地域貢献・文化推進事業

（1）大分香りの博物館

① 体験型香り文化振興事業として、大分県内 6 市町村に出向き、「香水づくり無料体験」を実施しました。また、大分県高等学校教育研究会家庭部会主催で、全国高等学校家庭科実践研究会が開催された際に、出前香水づくり教室や、香りの文化講座を行うなど、教育機関への支援事業を行いました。

② 通年事業として「香りの文化振興事業」を5月から12月まで実施し、ハーブ料理教室や親子香水づくり体験教室などの体験型事業に併せて、小泉武夫先生や吉武利文先生による文化講座を開催し、さらには、香りの地産地消をテーマに、日本の香料植物を取り上げ、その歴史や文化を考察する企画として「日本の香り展」を開催するなど、幅広い香り文化の振興に努めました。

③ 別府大学、別府大学短期大学部の研修はもとより、韓国からの大学生や教授等の研修を多く受け入れ、併せて韓国、中国からのインターンシップ生を受け入れるなど研修・研究の場としての提供を行いました。

（2）ゆふの丘プラザ

学校法人別府大学の研修センターとして、学生・生徒等の合宿研修を行うとともに、国内外の青少年を受け入れて自然体験学習を実施しました。

地域との連携や大学の講師の活用による研修プログラムを実施するとともに、特に新入生やリーダー研修会をはじめ、スポーツ合宿の促進、芸術関係研修の充実を図るなど研修施設としての機能強化に努めました。

4．学生・生徒・児童・園児の在籍者数

学校法人全体の学生・生徒・児童・園児数は、次の表のとおり 4,464 人で前年度より 76 人減少しました。

平成 24 年 5 月 1 日現在（単位：人）

学　　校	学　科　等	H24年度
大学院・学部	大学院	62
	文学部	1,172
	食物栄養科学部	383
	国際経営学部	407
	別科日本語課程	41
	小　　計	2,065
短期大学部	食物栄養科	106
	初等教育科	314
	地域総合科学科	112
	保育科	115
	専攻科	57
	小　　計	704
明豊高等学校	全日・通信制課程	574
明豊中学校		132
明星小学校		335
附属幼稚園		119
明星幼稚園		203
附属看護専門学校	全日・通信制課程	197
境川保育園		67
春木保育園		68
	合　　計	4,464

Ⅲ．財務の概要

平成 24 年度においては、学校法人別府大学中期計画 (5 ヶ年) の計画初年度であるにもかかわらず、収入の部においては、学生数の減少傾向が続き、下げ止まらないことにより学生生徒等納付金が減少し、また、支出の部においては、老朽化した施設設備の更新や統廃合等、教育研究環境の整備を計画的に進めることで、多額の資産処分差額が発生するなど、厳しい財政運営を見込んでいました。しかし、優先順位を考慮した事業の選別が効果をあげたほか、12 月に誕生した新政権の経済政策が追い風となり、平成 25 年度事業の前倒し申請による補助金収入の臨時的な増加や、円安による外貨評価益の発生等により、帰属収支差額の黒字を確保するとともに、第 2 号基本金の組入額を増額することもできるなど、中期計画を上回る実績をあげることができました。

なお、外部資金の獲得のうち、特に寄付金の増収については、学校法人別府大学に寄付をした個人が、地方税法の優遇措置 (寄付金税額控除) を受けられるよう積極的に取り組むとともに、ホームページや広報誌を利用した寄付者の顕彰制度の創設や同窓会との協力関係の構築等にも努めました。

(1)　貸借対照表

（単位：百万円）

科　　目	本年度末	前年度末	本年度末
資産の部			
固定資産	23,640	23,862	△222
有形固定資産	14,465	15,014	△549
その他の固定資産	9,175	8,848	327
流動資産	4,775	4,262	513
資産の部合計	28,415	28,124	291
負債の部			
固定負債	1,092	1,093	△1
流動負債	1,780	1,617	163
負債の部合計	2,872	2,710	162
基本金の部			
基本金の部合計	25,252	25,164	88
消費収支差額の部			
消費収支差額の部合計	291	250	41
負債、基本金及び消費収支差額の部合計	28,415	28,124	291

(2)　資金収支計算書

（単位：百万円）

科　　目	予算	決算	差異
収入の部			
学生生徒等納付金収入	2,980	2,990	△10
手数料収入	51	50	1
寄附金収入	7	8	△1
補助金収入	870	944	△74
資産運用収入	78	86	△8
資産売却収入	80	80	0
事業収入	347	357	△10
雑収入	247	263	△16
借入金等収入	0	0	0
前受金収入	1,201	1,386	△185
その他収入	203	212	△9
資金収入調整勘定	△1,535	△1,677	142
当年度収入合計	4,529	4,699	△170
前年度繰越支払資金	4,081	4,081	0
収入の部合計	8,610	8,780	△170
支出の部			
人件費支出	2,806	2,811	△5
教育研究費支出	753	740	13
管理経費支出	304	301	3
借入金等利息支出	0	0	0
借入金等返済支出	0	0	0
施設関係支出	145	144	1
設備関係支出	44	64	△20
資産運用支出	325	365	△40
その他の支出	287	235	52
資金支出調整勘定	△304	△315	11
当年度支出合計	4,360	4,345	15
次年度繰越支払資金	4,250	4,435	△185
支出の部合計	8,610	8,780	△170

(3)　消費収支計算書

（単位：百万円）

科　　目	予算	決　算	差異
消費収入の部			
学生生徒等納付金	2,980	2,990	△10
手数料	51	50	1
寄附金	23	24	△1
補助金	870	944	△74
資産運用収入	78	86	△8
資産売却差額	0	0	0
事業収入	347	357	△10
雑収入	247	263	△16
帰属収入合計	4,596	4,714	△118
基本金組入額合計	△114	△173	59
消費収入の部合計	4,482	4,541	△59
消費支出の部			
人件費	2,796	2,811	△15
教育研究費	1,278	1,265	13
管理経費	349	347	2
借入金等利息	0	0	0
資産処分差額	149	150	△1
徴収不能額	14	13	1
消費支出の部合計	4,586	4,586	0
当年度消費収入超過額	△104	△44	－
前年度繰越消費収入超過額	250	250	－
基本金取崩額	85	85	－
翌年度繰越消費収入超過額	231	291	－

(4)財産目録

（単位：百万円）

区　　分	金　　額		
資産額			
1 基本財産			
土地	184,885	㎡	3,729
建物	83,215	㎡	7,743
図書	369,139	冊	1,346
教具・校具・備品	11,581	点	774
その他			1,092
	小計		14,684
2 運用財産			
現金預金			4,435
積立金			8,711
土地	3,030	㎡	206
建物	673	㎡	33
収益事業元入金			3
その他			342
	小計		13,730
3 収益事業用財産			9
資産総額			28,423
負債額			
1 固定負債			
長期借入金			0
退職給与引当金			1,092
2 流動負債			
短期借入金			0
前受金			1,386
その他			394
3 収益事業用負債			1
負債総額			2,873
正味財産（資産総額−負債総額）			25,550

（5）収益事業の状況

国際交流会館及びゆふの丘プラザは、私立学校法第 26 条に基づく収益事業（請負業）です。これらの事業は、その収益を学校法人の教育研究活動に役立てることが目的ですが、平成 24 年度においては、ゆふの丘プラザにおいて温泉ポンプの故障に伴う特別損失が発生しましたが、国際交流会館の入居者の増加により全体では 3,382 千円の当期純利益を得ました。

①貸借対照表

（単位：千円）

資産の部	
Ⅰ　流動資産	6,216
Ⅱ　固定資産	2,440
1 有形固定資産	（ 2,440）
2 無形固定資産	（ 0）
3 投資その他の資産	（ 0）
資産の部合計	8,656
負債の部	
Ⅰ　流動負債	1,425
Ⅱ　固定負債	0
負債の部合計	1,425
純資産の部	
Ⅰ　元入金	3,414
Ⅱ　利益剰余金	3,816
当期純利益	（ 3,382）
純資産の部合計	7,231
負債・純資産の部合計	8,656

②損益計算書

（単位：千円）

科目	決算
Ⅰ　売上高	54,061
Ⅱ　売上原価	0
売上総利益	54,061
Ⅲ　販売費及び一般管理費	49,661
営業利益	4,400
Ⅳ　営業外利益	4
Ⅴ　営業外費用	0
経常利益	4,404
Ⅵ　特別利益	6,056
Ⅶ　特別損失	7,078
税引前当期純利益	3,382
法人税・住民税及び事業税	0
法人税等調整額	0
当期純利益	3,382

監事監査報告書

学校法人　別府大学
理事長　日高紘一郎　殿

平成 25 年 5 月 9 日
学校法人 別府大学
監事　此本 英一郎　㊞
監事　三 浦 義人　㊞

私たち監事は、私立学校法第 37 条第 3 項および学校法人別府大学寄附行為第 15 条に基づき、平成 24 年度（平成 24 年 4 月 1 日から平成 25 年 3 月 31 日まで）における学校法人の業務及び財産の状況について監査を行い、次のとおり報告いたします。

1．監査の方法

（1）理事会および評議員会に出席して業務の報告を聴取し、また重要な決裁書類等を閲覧し、業務の妥当性を検討しました。

（2）重要な財産については、会計帳簿と証憑書類との実査照合等を行いました。また、公認会計士から会計監査の報告を受け、あるいは適時その監査に立ち会い、計算書類等の妥当性を検討しました。

2．監査意見

（1）学校法人別府大学の業務は適正であり、その計算書類等は学校法人の財産の状況を適正に表示しているものと認めます。

（2）学校法人の業務または財産に関し不正の行為または法令もしくは寄附行為に違反する重大な事実はないものと認めます。

以上

別府大学教育研究振興資金
平成25年度募金寄付者ご芳名

別府大学教育研究振興資金にご寄付いただきました方々に、厚く御礼申し上げますとともに、感謝の意を込めて、ここにご芳名を掲載させていただきます。なお、ご芳名の公表を希望されない方につきましては、掲載しておりません。

平成 25 年 7 月 31 日現在

個人からのご寄付

赤木　清 様　菊池　康治 様　中山　俊一 様
阿比留真一 様　坂井　朋哉 様　藤田　博文 様
荒武　義則 様　庄　隆司 様　三浦　朗弘 様
飯沼　俊喜 様　住原　宏子 様　村山健二郎 様
小川　澄弘 様　園田　功 様　杢田　稔 様
甲斐　良一 様　土谷　良子 様　（五十音順）

法人・団体等からのご寄付

あおい産婦人科 様

新聞で紹介された別府大学・短大の活動

（平成 25 年度前半の主なもの）

新　聞　社	内　　容
大分合同4/5、今日4/5	別府大、別府大短期大学部の合同入学式
今日4/6	明豊中髙で15回目の入学式
今日4/6	別府大学交流校のモンペリエ第３大学　バルトマン准教授が講義　［文化財学科］
大分合同4/16	明豊中学が３年ぶり優勝　中学校の市長旗軟式野球大会　［明豊中学］
大分合同5/15	効果的に“自分”つたえて　面接のノウハウについて　［佐藤敬子教授］
大分合同5/16	大学でも頂点狙う　県高校剣道界名伯楽　岩本さん別府大監督に　［岩本貴光講師］
大分合同5/17	別府市男女共同参画センターの運営委員　会長に渡辺一弘氏　［渡辺一弘准教授］
大分合同5/21	高校生、園児の要望に沿って　父の日弁当に挑戦　［短大食物栄養科］
今日5/24	ツーロックで自転車守れ　明豊高校生ら24人が呼びかけ　［明豊高校］
今日5/25	バラやハーブの花満開　大分香りの博物館の庭園　［大分香りの博物館］
西日本5/25	意外と少ない!　ウォーキングの消費エネルギー量　［吉村良孝准教授］
毎日5/27、大分合同5/28	国東特産「七島イ」を棚田で　別府大生が苗植え　［夢米棚田プロジェクトチーム］
大分合同5/27	「私の紙面批評」　農業遺産掘り下げて　［飯沼賢司教授］
大分合同5/28	九州学生本格焼酎プログラム　第４回講演会　［段上達夫教授］
今日5/30	みらいギャラリーで荒金大琳展　［荒金大琳教授］
朝日6/2	DV事件矛盾　被害者の納得が重要　［金子進之助教授］
今日6/3、大分合同6/7	明豊中が初企画のファンファンデー　英語漬けの半日過ごす　［明豊中学］
大分合同6/3	「私のエベレスト」へ　［食物栄養学科３年松本厚子］
大分合同6/7、今日6/7	地域に根ざし60年　別府大短期大学部で式典　卒業生は２万5千人
西日本6/16	特製弁当「父の日」にどうぞ　別府大短大生が考案　［短大食物栄養科］
読売6/17、大分合同6/19	鉄輪温泉学生が案内　別府大短大部「地獄蒸しガールズ」　［短大食物栄養科］
今日6/17	県とタイアップで別府大が「夢米棚田プロジェクト」　学生と教師65人が田植え体験
大分合同6/23、西日本6/27	町づくりに学生の視点　天瀬名所巡り記録　［地域総合科学科］
朝日6/26	熊八翁　生誕150年式典とシンポジューム講師　［中山昭則教授］
大分合同6/27	お茶摘んで、揚げて、おいしい　別府大短大「育ドル娘」が講座　［短大食物栄養科］
大分合同6/28	命の大切さや親になる心構えを学ぶ　連続講義スタート　「佐藤敬子教授」
今日6/28	明豊中学高校が体育大会
大分合同7/2	ユーモア交えて調理法を紹介　「つきぢ田村」日本料理講習会　［短大食物栄養科］
毎日7/9	毎日書道展　毎日賞喜びの声　［卒業生　原田美樹、日名子理恵］
大分合同7/9	「さんふらわー」海上ライブで食育PR　別府大短大「育ドル娘」　［短大食物栄養科］
大分合同7/9	親子で作る郷土料理教室　炭酸まんじゅう　［西沢智恵子教授］
今日7/1、7/27	13校132人が参加　別府大で国際セミナー開講
大分合同7/11	管理栄養士国家試験希望者が急増　別府大短大が支援講座　［短大食物栄養科］
大分合同7/20	日出で「おくど市」竹細工作品も特別展示　［伊藤昭博教授］
朝日7/29	県吹奏楽コンクール４代表が決定　大学Aの部は別府大学
大分合同7/31	卓球の近藤龍斗・未来・蓮（明豊中）さん　きょうだい全力プレー　［明豊中学高校］
大分合同7/31	暑い夏、自分はこれで乗り切る!!［短大食物栄養科　安部真悠子］
読売8/4	短大生温泉デザート開発　別府「夏祭り」で限定販売　［短大食物栄養科］

表紙の挿絵

「橙」S100　キャンバス･油彩

佐藤　麻里子（国際言語･文化学科絵画コース4年）

作者コメント

日常過ごすなかで、良いなと思うものを絵にしています。この絵は、夕陽に照らされてオレンジに光る花が綺麗だと感じ、表現しようと思いました。

編集後記

本学は地域に根ざした大学として地域貢献につとめる一方、夙に国際理解教育にも取り組んできました。前号では国際理解教育の下地となる本学の国際交流について紹介しました。今号では、そのような国際交流を通じた留学生の受け入れについて「特集」のコーナーで取り上げました。また、「教育CloseUp」では短大の地域総合科学科がこれまで進めてきた国際交流の取組みについても紹介しています。今後とも本誌面を通して本学の特色をどしどし紹介してまいります。　（友永）

真理はわれらを自由にする

Be-News 2013.Autumn（別府大学通信　No.107）

編　集　別府大学メディア教育・研究センター　広報部
発行日　平成 25 年 9 月 27 日
印　刷　佐伯印刷株式会社